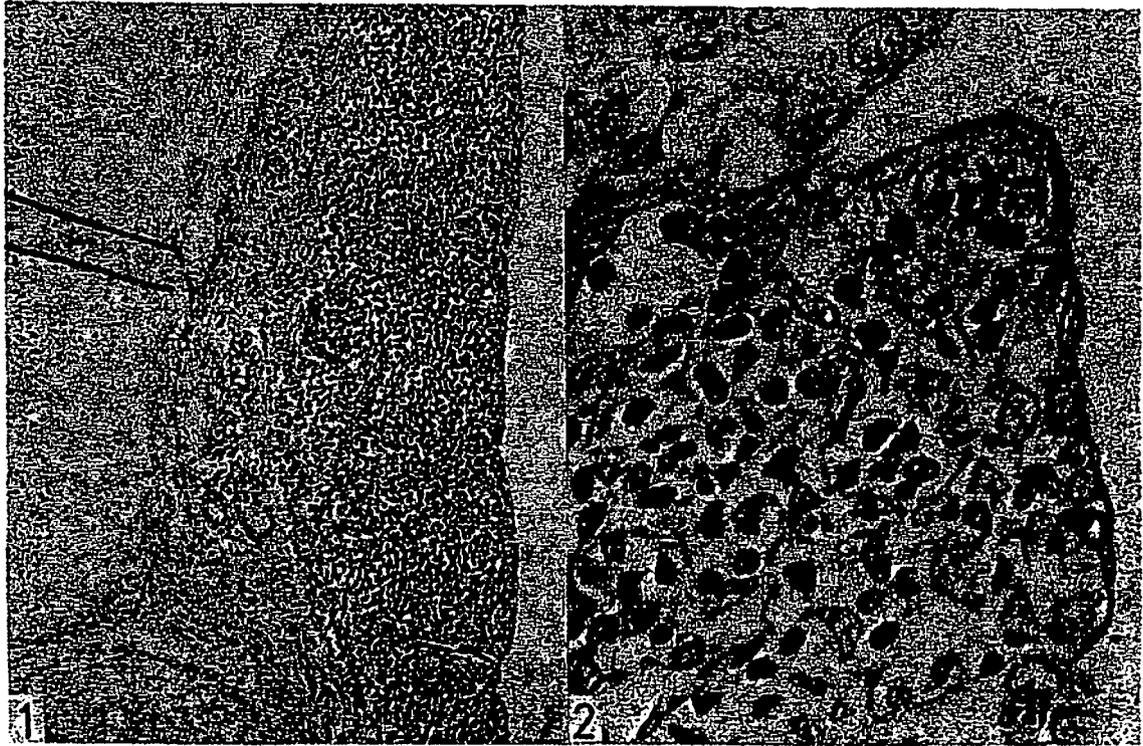


鶏伝染性気管支炎における気管の病変

日本生物科学研究所 第13回獣医病理学研修会標本 No.190



H. & E., ×40

H. & E., ×400

34日令のSPF鶏の結膜嚢内に、鶏IBウイルスのIowa 97株に感染した発育卵の漿尿液0.03ml(約 $3 \times 10^{5.5}$ E I D₅₀)を接種し、特記すべき臨床症状を認めぬままに、4日後に放血致死させた。提出標本はその鶏の気管上部の横断切片である。

肉眼的所見：気管腔内に灰白色粘液の軽度の増量を認めたほか、特別の異常を認め得なかった。

組織学的所見：粘膜は固有層と下織における細胞浸潤、充出血および水腫によって著しく厚みを増している。細胞浸潤の高度な部位では、粘液腺は圧迫されて変形・細長化し、減数・消失もある。浸潤細胞は下織を中心とする粘膜層の深部では、すでに核仁を失なった成熟小リンパ球が主体を占め、核濃縮を呈するものもしばしば見られる。所々にBursa依存性リンパ濾胞の形成もあり、リンパ組織過形成の像を示している。他方、固有層を中心とする粘膜の表層では、浸潤細胞は多種で幼若リンパ系細胞と非食食性細胞が目立ち、活性に転じた線維芽細胞、偽好酸球を混じり、少数のプラズマ細胞も見られる(図1)。

粘膜上皮細胞は所々において基底膜から剥れ、単層扁平上皮あるいは単層立方上皮細胞様に変形し、細胞質には大小の空胞を容れ、線毛を失なうものが多い。気管腔内には少量の滲出物と剥離脱落した上皮細胞が認められる(図2)

粘膜表層部における細胞浸潤や循環障害は、主として変性上皮細胞に対する反応性病変、つまりウイルスの感染・増殖と直接結びつく変化——古典的な炎症!?——とみて大きな誤りはないだろう。問題は粘膜深層におけるリンパ組織過形成として表現される病変である。この変化は上皮細胞の変性・再生の推移とは直接的に係わりあうことなく、疾病経過と共に増強され長期間残存する傾向がある。免疫学的な概念を導入しないと理解し難い組織表現のように考えられる。

病変の意味づけはともかく、提出標本に観察される病変は鶏IBウイルスの感染による急性カタル性気管炎と診断される。